

戦争と平和の問題での 二つの路線

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（五）

外文出版社

北京

戦争と平和の問題での二つの路線

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (五)

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

(1963年11月19日)

外文出版社
北京

戦争と平和の問題での二つの路線

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(五)

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

(一九六三年十一月十九日)

全世界はいまあげて戦争と平和の問題を論議している。

極悪な帝国主義制度は、世界人民に数えきれないほど多くの戦争をもたらし、二回にわたる世界大戦の災やくをもたらした。帝国主義戦争は、人民にきわめて大きな苦難をなめさせると同時に、また人民を教育した。

第二次世界大戦後、全世界の人民は、普遍的に、強烈に世界の平和を要求している。ますます多くの人が、世界の平和をまもろうとするならば、帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対する闘争をおこなわなければならない、ということをとってきた。

全世界のマルクス・レーニン主義者は、人民大衆の平和を求める気持ちを重視し、世界平和擁護のたたかいの先頭に立つ責任があり、帝国主義の侵略政策と戦争政策とたたかい、かれらのペ

テンをあばき、その戦争計画を挫折させる責任があり、大衆を教育し、かれらの自覚を高め、世界平和擁護のたたかいを正しい方向へみちびいていく責任がある。

マルクス・レーニン主義者とは逆に、現代修正主義者は帝国主義の政策の必要にこたえて、帝国主義がウソ八百で大衆をあざむき、人民の視線をそらせ、反帝国闘争を弱化し、破壊するのを助け、帝国主義の新戦争準備計画を援護している。

戦争と平和の問題で、マルクス・レーニン主義の路線は、修正主義の路線と、根本的に対立している。

マルクス・レーニン主義の路線は、世界平和をかちとるのに有利な、正しい路線である。これこそ、中国共産党を含むあらゆるマルクス・レーニン主義的政党とあらゆるマルクス・レーニン主義者が一貫して堅持している路線である。

修正主義の路線は、新しい戦争が起こる危険性を助長するあやまつた路線である。これこそ、ソ連共産党指導部がソ連共産党第二十回大会以後逐次発展させてきた路線である。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡やソ連共産党指導部のおおくの言論は、戦争と平和の問題で、ウソ八百をならべたて、中国の共産主義者を誹謗しているが、これはこのような意見の相違の本質をおおいかくすことができない。

以下、われわれは、戦争と平和の問題でのマルクス・レーニン主義的路線と現代修正主義的路線の主要な意見の相違を分析してみよう。

歴史の教訓

資本主義が帝国主義に発展したのち、戦争と平和の問題は、終始マルクス・レーニン主義が修正主義とたたかってきた重大な問題である。

帝国主義は現代戦争の根源である。帝国主義の平和的欺瞞政策と戦争政策とは、交互にもちいられている。帝国主義はつねに、平和というウソを使って、かれらの侵略的犯罪行為と新しい戦争をおこす準備活動をおおいかくしている。

レーニンもスターリンも、うますたゆまず帝国主義の平和ペテンとたたかうよう各国人民に呼びかけた。

レーニンは、帝国主義政府は「すべて口先では平和とか正義とかをさかんにとなえているが、実際には侵略的な強盗戦争をすすめている」①とのべたことがある。

スターリンは、帝国主義が実行している平和主義というのは、「一つの目的しか追求していない。つまり新しい戦争を準備するために、平和についての声高らかな文句で大衆をあざむくこと

である」⑧とのべたことがある。スターリンはさらに、「帝国主義的平和主義は平和の道具だと思っている人がたくさんいる。これは根本からまちがっている。帝国主義的平和主義は、戦争準備の道具であり、この準備を平和についての偽善的な文句でおおいかくす道具である。このような平和主義とその道具である国際連盟なしには現在の状況のもとでは戦争準備は不可能なのである」⑧とのべた。

レーニンやスターリンとは反対に、第二インターの修正主義者、労働者階級の裏切り者は、帝国主義を助けて大衆をだまし、二回の世界大戦をおこした帝国主義の共犯者となった。

第一次世界大戦前、ベルンシエタインとカウツキーを代表とする修正主義者は、極力ニセの平和ということばをもちいて、人民の革命的闘志をマヒさせ、世界戦争を準備する帝国主義の計画を粉飾し、おおいかくした。

第一次世界大戦のぼつ発前後、旧修正主義者はあいついで「平和」のマスクをかなぐりすて、自国の帝国主義政府の側に立ち、帝国主義による世界再分割の戦争を支持した。国会においては軍事費の支出に賛成投票した。また「祖国防衛」というスローガンをいつわって利用し、他国の兄弟的労働者を虐殺する戦争に参加するよう自国の労働者階級を扇動した。

帝国主義者が帝国主義の条件にもとづいて停戦する必要にせまられたとき、カウツキーを代表

とする修正主義者はこんどは、「『自分も生きのびてゆく、他人も生きのびさせてゆく』という原則のうえに、お互いに了解しあつた平和をうちたてることほど、わたくしを幸運に感じさせるものはない」④などという甘いことばで、人心をまどわし、革命に反対した。

第一次世界大戦が終わつたのち、裏切り者カウツキーとかれの後継者は、帝国主義の平和ペテンの囃子方はやしという役割を、いつそうおく面もなく演じたのである。

戦争と平和の問題で、第二インターの修正主義者は、ひじょうに多くのウソをまき散らした。

第一、帝国主義を美化し、全世界人民の闘争の視線をそらせた。カウツキーは、「世界平和にとつて、帝国主義の危害は依然として微々たるものにすぎない。これに反し、東方の民族主義的意図と各種の独裁制度の危害のほうが、さらに大きいように見える」⑤といった。このことばは、帝国主義が戦争の根源ではなく、東方の被抑圧民族と偉大な平和のとりであるソビエト国家がかえつて戦争の根源であるということを入びとに信じこませようとするものであつた。

第二、帝国主義を助けて、新しい戦争の危険性を粉飾し、おおいかくし、大衆の闘志をマヒさせた。一九二八年、カウツキーは、「人がとが今日なお帝国主義戦争の危険性をさかんに論じてたてているとすれば、かれらが根拠としているものは、昔からいいふるされてきたデララメであつて、われわれの時代にたいする考察ではない」⑤とのべた。これらの修正主義者はまた、帝国

主義戦争がさげえないものだと考えている人は「宿命論の歴史観に執着しているのだ」⑥といつた。

第三、戦争は人類を絶滅させるだろうという論調で、大衆をおどした。カウツキーは、「このつきにおこる戦争は、貧困と災難をもたらすだけでなく、あらゆる文明をも徹底的に破壊してしまふ。そのあとに残されたもの（少なくともヨーロッパにおいて）は、わずかにけむりのたちこめる廢虚と腐りはてた死体だけであろう」⑦とのべた。これらの旧修正主義者はまた、「最近おこった戦争は、全世界にきわめて大きな災難をもたらしたが、このつきにおこる戦争は全世界を完全に破滅させるであろう。単に新しい戦争を準備するというこのことだけでも、全世界を台無しにしてしまふであろう」⑧といつた。

第四、正義の戦争と非正義の戦争を区別せず、革命を許さなかつた。一九一四年、カウツキーは、「現在の条件のもとでは、一般的にいって、各民族、とくにプロレタリアートにとって不幸をもたらさない戦争はありえない。われわれが討議しているのは、どのような措置をとれば、ほつ発する危険性のある戦争を防止することができるかということであつて、どういう戦争が有益で、どういう戦争が有害であるかということではない」⑨といつた。かれはまた、「あらゆる文明国の広はんな人民大衆のあいだに恒久平和への要求がますます強まつてきている。このこと

は、本来われわれの時代の重大問題であつたものを一時的に第二義的な地位にひきさげた」⑩といつた。

第五、唯武器論を宣伝し、革命的武装闘争に反対した。カウツキーは、「将来の革命闘争においては、武力によつて勝敗を決する度合いはますます小さくなるであろう。その原因の一つは、すでに一度ならず指摘したように、現代政府の軍隊がもっている装備は、『一般庶民』のもつてゐる武器よりはるかに優勢であり、このような優勢はつねに、一般庶民のどのような反抗にも、ことのはじめからなら成功ののぞきをもたせないからである」⑩とのべたことがある。

第六、軍縮によつて世界平和をまもることができ、民族平等を実現することができるというあやまつた議論をまきちらした。ベルンシュタインは、「この地球上に平和を確立して人びとに歡樂をもたらそう。われわれは歩みをとどめて休んではならない。われわれは、社会を順調に発展させ、国際的協議と軍縮を通じてすべての人が幸福になり、すべての民族の権利が一律平等になるように努力しなければならない」⑩と語つた。

第七、軍縮によつて節約した金で後進国を援助することができるというあやまつた議論をまきちらした。カウツキーは、「西欧の軍備負担が少なければ少ないほど、より多くの資金をもちい

て、中国、ペルシャ、トルコ、南アメリカなどの地域で鉄道を敷くことができる。これらの工事

は「無敵艦」を建造するより、工業の発展を促進するにはるかに有効な手段である」⑩とのべた。

〔第八〕帝国主義の「平和戦略」に献策した。カウツキーは「文明開化のヨーロッパ各民族（アメリカ人も同じ）は、自己の経済的、文化的手段をもちいるほうが、軍艦や飛行機にたよるよりも、近東と極東の平和を維持することができる」⑪といった。

〔第九〕帝国主義のあやつる国際連盟を大いにほめちぎった。カウツキーは「国際連盟が存在しているということだけでも、平和事業の偉大な成果を意味している。それは、他のいかなる機構も提供することのできない平和擁護の道具である」⑫とのべた。

〔第十〕アメリカ帝国主義に依存することによって世界平和がまもれるという幻想をまきちらした。カウツキーは、「現在、アメリカは世界でもっとも強い国である。いったんアメリカが国際連盟のなかで、あるいは国際連盟とともに戦争防止のために力を尽くせば、国際連盟は抗し難い力をもつようになる」⑬といった。

レーニン、カウツキーらの醜悪な正体を容赦なくあばいた。レーニンは、第二インター修正主義者の平和主義は「人民にたいする一種の慰めにすぎず、各国政府が今後の帝国主義の大戦争で、大衆を手なずけるための便利な手段であるにすぎない」⑭とのべた。

スターリンは、これらすべてのなかでもっとも重要なことは、社会民主主義が労働者階級の内部における帝国主義的平和主義の主要な水先案内であること、——したがって社会民主主義は、新しい戦争と干渉の準備の仕事のうえで、労働者階級の内部における資本主義の主要な支柱であるという点である⑮と指摘した。

人びとは戦争と平和の問題で、フルシチョフ同志の言論を一読しただけで、またフルシチョフの言論とベルンシュタイン、カウツキーの言論を照らしあわせただけで、フルシチョフの観点にはなら新しく創造されたものはなく、それが第二インターの修正主義のやまなおしであることを発見するであろう。

戦争と平和という人類の運命にかかわる問題で、フルシチョフは、いまやベルンシュタインの後塵を拝し、カウツキーの後塵を拝しているのである。歴史的経験は、このことが世界の平和にとってひじょうに危険な道であることを証明している。

効果的に世界平和をまもり、新しい世界戦争をふせぐために、全世界のマルクス・レーニン主義者と全世界の平和を愛する人民は、フルシチョフのあやまった路線を拒否し、これに反対せざるをえないのである。

最大のペテン

世界平和の主要な敵を平和愛好の天使だといくゝるめることほど大きなペテンはこの世界にならぬ。
第二次世界大戦後、アメリカ帝国主義はドイツ、イタリア、日本などのファシストの地位に取って代わり、世界にいまだかつてない一つの大帝国を築きあげようとしてきた。アメリカ帝国主義の「世界戦略」の一貫した目標はつぎのようなものである。すなわちアメリカと社会主義陣営のあいだにある中間地帯を侵略、支配し、被抑圧人民と被抑圧民族の革命を撲滅し、さらに進んで社会主義国を消滅して、全世界を制覇することである。

こうした世界制覇の野心を実現するために、アメリカ帝国主義は第二次世界大戦後の十八年らしい、ひっきりなしに世界各地で侵略戦争と反革命的武力干渉をおこない、積極的に新しい世界戦争を準備してきた。

事実はいまにはつきりしている。すなわち、帝国主義が依然として現代における戦争の根源であり、現代における侵略と戦争の主要な勢力はアメリカ帝国主義である。この点については、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明が、いずれも明確な断定をくだしている。

ところが、ソ連共産党指導部はそれとは逆に、アメリカ帝国主義の主要な代表的人物が平和を愛しているとみなしている。かれらは、情勢を冷静に評価できる「「理知」派が現われたといっている。そして、このような「理知」派の代表的人物というのは、アイゼンハワーとケネディにはかならないのである。

フルシチョフはかつて、アイゼンハワーをほめたたえ、「かれは自国人民の絶対的信頼をえている人として」、「ここから平和を望み」、「やはりわれわれと同じように平和を保障するためここをくだしている」とのべている。

フルシチョフはいままたケネディをほめたたえて、つぎのようにいつている。ケネディはアイゼンハワーよりもいっそう世界平和擁護の責任をになう人であり、「平和擁護にたいする関心を示している」、「地球上での平和な生活と創意に富んだ労働のために、たよりになる条件の保証」をかれに期待できる、と。

ウソをまきちらし、帝国主義を美化する面で、フルシチョフは第二インターの修正主義者とまったく同じように力コブをいれている。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、かれらのこうしたウソに同意しない人びとにこう問いかけている。「すべてのブルジョア政府があらゆる面で、いかなる理知もみな失ってしまったと、

本当に思っているのか」と。

かれらがマルクス・レーニン主義の常識さえ無視しているのは、あきらかである。階級社会において階級を超越した理知は絶対にはありえない。プロレタリアートにはプロレタリアートの理知があるし、ブルジョアジーにはブルジョアジーの理知がある。理知というのは、とりもなおさずたくみにみずからの階級の根本的利益にとづいて政策を制定し、たくみにみずからの階級の根本的立場にもとづいて行動することである。ケネディのごときやからの理知とは、とりもなおさずアメリカ独占ブルジョアジーの根本的利益にもとづいて行動することであり、帝国主義の理知にはかならないのである。

世界における階級的力関係がますます帝国主義に不利になっている情勢のもとで、アメリカ帝国主義の侵略政策と戦争政策がたえず挫折している情勢のもとで、アメリカ帝国主義者はいつそう平和のベールで自分を偽装しなければならなくなっている。

ケネディはたしかに、平和的な言辞をもちい、平和的な手段をろうすることにたけている。しかし、ケネディの平和的欺瞞政策は、その戦争政策と同じように、すべてアメリカ帝国主義の「世界戦略」に奉仕しているものである。

ケネディの「平和戦略」は、とりもなおさず全地球をすべてアメリカ帝国主義の「法律と正義」を基礎とする、「自由世界共同体」のなかに統一してしまうことである。

ケネディの「平和戦略」の主要点はつぎのとおりである。

平和的な手段をもちいて、アジア、アフリカおよびラテンアメリカでアメリカの新植民地主義をおしひろめること。

平和的な手段をもちいて、他の帝国主義国と資本主義国に浸透し、これを支配すること。

平和的な手段をもちいて、社会主義国がユーゴスラビア式の「平和的進化」の道を歩むよう推進すること。

平和的な手段をもちいて、全世界人民の反帝闘争を弱め、破壊すること。

最近開かれた国連総会の演説のなかで、ケネディは、米ソ平和の条件はつぎのようなものであると気違いじみて公言している。

一、ドイツ民主共和国を西ドイツに統合する。

二、社会主義キューバの存在は許さない。

三、東ヨーロッパ社会主義国に「自由な選択」を許すようにする。いいかえれば、これらの国々に資本主義の復活を實行するようにする。

四、社会主義国が被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争を支持するのを許さない。

もし可能であるならば、「平和的な手段」で自分の目的を達成することもこれまた、帝国主義者や植民地主義者の慣用する手口の一つである。

反動的階級が自己の支配を維持し、対外拡張をおこなうにあたり、従来から二刀流の手段にたよってきた。一つの手段は牧師流の欺瞞、他のひとつは死刑執行人流の弾圧である。帝国主義の平和的欺瞞政策と帝国主義の戦争政策は、従来から交互に使われ、相互に補いあつてきたものである。アメリカ独占ブルジョアジーの代表としてのケネディの理知とは、いっそう陰險なやり方でこの二刀流の手段をもてあそぶことにほかならない。

反動的支配階級がたよっている主要な手段は終始、暴力である。牧師流の欺瞞は暴力にたいして補助的な役割をはたしているものである。帝国主義は従来から力の立場に依拠して勢力圏を分割してきたのである。ケネディはこの点についてひじょうにはつきりのべている。かれは、「結局、平和を擁護する唯一の方法は、最終的にはわが国のために戦う用意をするということであり、しかも、いったことはかならずやつのけるといふことである」とのべている。ケネディは政権をとつてから、いわゆる「柔軟反応戦略」をおしすすめ、「多種多様な軍事力」を早急に創設すること、「全面的な実力」を強化することを要求してきた。これによつてアメリカが全面戦争または局地的戦争、核兵器をもちいる戦争または通常兵器をもちいる戦争、大規模な戦争また

二刀流の
手段
の
一つは
欺瞞
の
一つは
弾圧
の
一つは
欺瞞
の
一つは
弾圧

は小規模な戦争、たとえどのような戦争であろうと、思うがままにあらゆる戦争をおこなうことができるようにしようとしたのである。ケネディのこの気遣いじみた計画は、アメリカの軍備拡張・戦争準備活動をかつてなかつた最高の段階にもりあげている。アメリカ官邸筋が公表したいくつかの事実を見ていただきたい。

第一、アメリカ政府の軍事費支出は、一九六〇会計年度の四六七億ドルから一九六四会計年度の予定額六〇〇億ドルにまで増加しており、平和の時期における最高を示し、朝鮮戦争期間のレベルをも上回っている。

第二、ケネディは、最近つぎのように公言している。ここ二年余のあいだに、アメリカ「戦略警備軍」の核兵器保有量は一〇〇パーセント増加した。そして戦闘準備をととのえた陸軍師団の数も四五パーセント、輸送機の購入高は一七五パーセント、「特殊ゲリラ隊」と「暴動対策軍」はそれぞれ五倍近く増加している。

第三、アメリカの戦略目標統合計画参謀部は、すでにソ連その他の社会主義諸国にたいして核戦争をおこなう計画を制定している。アメリカ国防長官マクナマラは、今年のはじめ、つぎのように公言した。「われわれは全期間にわたつて、ソ連のほとんどすべての『やわらかい』または『なかばかたい』軍事目標（すなわち地上にあるものとなかば地下にある基地）と多くのきわめ

て強固なミサイル発射場を破壊できる力をつくりあげる用意をしている。このほか、ひじょうによく防備された力をつくりあげ、それを使ってかれらの都市と工業地帯を攻撃し、または将来攻撃するためにそなえようとしている」と。

アメリカはさらに一歩進んで社会主義陣営にほこきをむけた核ミサイル基地網を強化し、海外におけるミサイル装備の原子力潜水艦の配置を大いに強めている。

それと同時に、アメリカの指揮下にある北大西洋ブロックの軍隊は、今年にはいつてから東に向かつて推し進み、ドイツ民主共和国やチェコスロバキアの国境の近くにまで迫っている。

第四、ケネディ政府はアジア、ラテンアメリカ、アフリカにおける軍事的配置を強化するとともに、極力、陸、空、海三軍の「特殊作戦部隊」を大きく拡充し、これによってこれらの地域における人民の革命運動にそなえている。アメリカはベトナム南部を「特殊戦争」を進める実験場にしており、南ベトナムに在るアメリカの軍隊はすでに一六〇〇〇人以上に増加している。

第五、ケネディ政府は戦争指揮機構を強化した。ケネディ政府はすでに「進撃司令部」を設け、平時に高度の戦闘準備を保っている陸空連合部隊を統轄し、それによって時を逸せずこれらに動員して、世界各地で戦争をひきおこすことができるようにしている。また地上および地下の全国軍事指揮センターを設け、さらに航空機内と軍艦内にそれぞれ設けられた緊急空中指揮所と

緊急海上指揮所を編成した。

これらの事実、アメリカ帝国主義が現代におけるもつとも狂気じみた軍国主義と新しい世界戦争の画策者であり、世界平和のもつとも凶悪な敵であることを物語っている。

以上のことからわかるように、アメリカ帝国主義は、フルシチョフがそれにたいして聖書を讀みあげ、賛美歌を歌ったからといって、美しい天使に変わるわけではない。またフルシチョフがそれに線香をあげて三拝九拝したからといって、慈悲深い菩薩に変わるわけではない。この面では、フルシチョフがどのようにアメリカ帝国主義を助けようとしても、アメリカ帝国主義はいささかもフルシチョフの顔を立てようとはしないのである。アメリカ帝国主義はたえず新たな、数多くの侵略活動と戦争活動をおこなうことによって、自分で自分の平和的カムフラージュをあげている。それはとりもなおさずフルシチョフにたえずびんたを食らわせ、帝国主義を美化するかれのさまざまなあやまった論調の破産を宣告していることにもなる。このことは甘んじてアメリカ帝国主義の弁護人をつとめるものにとっては、まったく悲しむべきことであろう。

新しい世界戦争防止の可能性の問題について

アメリカをかしらすとする帝国主義はいま、新しい世界戦争を積極的に準備している。戦争の危

険性は存在しているのである。これは事実である。われわれはこの事実を人民大衆に告げ知らせなければならぬ。

しかし、新しい世界戦争は防止できるのか、できないのか。

この問題についての中国共産主義者の観点は従来からきわめて明確である。

第二次世界大戦が終わったのち、毛沢東同志は戦後の国際情勢について科学的な分析をおこないい、いち早く新しい世界戦争は防止できるという論点を提起した。

毛沢東同志は、早くも一九四六年に、アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロング女史との有名な談話のなかでつぎのようにのべた。

「いまだき、第二次世界戦争がおわって間もないこのとき、アメリカの反動派があのように鳴り物いりで米ソ戦争を強調し、険悪な空気をかきたてているのでは、だれでも、かれらの実際の目的を見きわめずにはいられません。ほんとうは、かれらが、反ソのスローガンのもとで、アメリカの労働者と民主的な人びとに気違いじみた攻撃をくわえ、また、アメリカの対外拡張の対象となつてゐるすべての国ぐにをアメリカの従属物に変えようとしてゐるのです。アメリカの人民と、アメリカの侵略の脅威をうけているすべての国ぐにの人民は、団結して、アメリカの反動派と各国におけるその手先の攻撃に反対すべきであると、わたしは考えます。このたたかいが勝利

1946

したときだけに、第三次世界大戦はさげることができるので、そうでなければ、さげることができません。」⑤

毛沢東同志のこの話は、当時国際情勢についてなされた一種の悲観的な見通しを対象として語られたものである。当時は、アメリカをかしらとする帝国主義と各国の反動派が日ましに反ソ、反共、反人民の活動を強め、いわゆる「米ソは必ず戦う」、いわゆる「第三次世界大戦は必ずばつ発する」と吹聴していた。蔣介石反動派も大げさに同じような宣伝をおこなつて、中国人民をおどしていた。当時ある一部の同志はこのようなおどしにたいして、恐怖を感じ、アメリカ帝国主義の支持をうけた蔣介石反動派がはじめた武力攻撃を前にして、軟弱な態度をしめし、革命戦争をもって反革命戦争にだんこ反対する勇氣に欠けていた。毛沢東同志は、まさにその反対であった。毛沢東同志は、世界の反動勢力にたいして効果的な、だんこたる闘争をおこなひさえすれば、新しい世界大戦はさげることができると指摘した。

毛沢東同志の科学的断定は、中国革命の偉大な勝利によつてすでに証明されている。

中国革命の勝利は、国際間の階級的力関係にきわめて大きな変化をもたらした。一九五〇年六月、毛沢東同志はつぎのように指摘した。

「帝国主義陣営の戦争による脅威は依然として存在し、第三次世界大戦の可能性は依然として

1950

存在している。だが、戦争の危険をくいとめ、第三次世界大戦のばつ発をさけようとする闘争の力は、ひじょうに早い速度で発展しており、全世界の大多数の人民の自覚の程度は高まりつつある。全世界の共産党が団結できるすべての平和・民主勢力とひきつづき団結し、かつこれらの勢力をいっそう大きく発展させることができさえすれば、新しい世界戦争はくいとめることができるのである。」^⑩

一九五七年十一月、毛沢東同志は各国兄弟党会議の席上、第二次世界大戦後の国際関係の変化を詳細に分析して、当時国際情勢の発展がすでに新しい転換点に到達していることを論証した。

毛沢東同志は中国の古典小説のなかにある、「東風が西風を圧倒する」という熟語をかりて、この情勢を形象的に比喩した。毛沢東同志は、「わたしは、当面の情勢の特徴は東風が西風を圧倒していること、いいかえれば、社会主義の力が帝国主義の力にたいして圧倒的な優勢をしめしていることであると考えている」^⑪と語った。

毛沢東同志は国際間の階級関係を分析を加えることにより、この結論をみちびきだしたのである。毛沢東同志は、社会主義陣営、国際労働者階級と共産党、被抑圧人民と被抑圧民族、平和を愛する人民と国ぐにをはつきりと「東風」の側においた。そして、「西風」の側には、帝国主義と反動派の戦争勢力に限定した。この比喩の政治的意味は、ひじょうにはつきりしており、また

ひじょうに適切である。ソ連共産党指導部とその追隨者は、この比喩を歪曲して地理的、人種的、あるいは気象的概念だとみなしているが、これは、かれらがみずからを「西側」の隊列へ無理にわりこませて、帝国主義のきげんをとり、ヨーロッパと北アメリカの民族的排外主義をおおりにたてていることを暴露しているにすぎない。

毛沢東同志が「東風は西風を圧倒する」ということを提起したのは、主として新しい世界戦争を防止する可能性がふえたこと、社会主義国が平和的建設のための環境をかちとる可能性がふえたことを論証するためであった。

毛沢東同志がおこなったこれらの断定は、中国共産党が一貫して堅持してきた観点である。以上の点から見ても、中国共産党は「新しい世界戦争を防止する可能性を信じない」と称するのは、ソ連共産党指導部がことさらデッチあげたデマであることがわかるのである。

以上の点から見ても、第三次世界大戦は防止する可能性があるという論点はマルクス・レーニン主義者がかなり早くから指摘したものであつて、けつしてソ連共産党第二十回大会がはじめて提起したものではなく、またけつしてフルシチョフの「創造」などというものでもないことがわかる。

しかし、フルシチョフが、ほんとうになんらの創造もやつていないといえるだろうか。いや、

とにかく創造はしている。ただ惜しいことには、これらのいわゆる創造と称するものは絶対にマルクス・レーニン主義ではなく、修正主義なのである。

第一、フルシチョフは、新しい世界戦争は防止する可能性があるということ、自分勝手に防止できるといふただ一つの可能性があるだけで、新しい世界戦争の危険性は存在しないといふらしている。

マルクス・レーニン主義者は、新しい世界戦争は防止する可能性があることを指摘することにも、かならず帝国主義が世界戦争をおこす危険性も同時に存在していることを指摘しなければならぬ、と考える。この二つの可能性を同時に指摘して、正しい政策をとり、両方の準備をととのえてこそはじめて、大衆を立ちあがらせて世界平和擁護の闘争をすすめるのに役だつのである。また、こうしてこそはじめて、帝国主義が世界戦争をいつたん世界の人民におしつけた時、社会主義国とその人民、平和を愛する全世界の国々にとその人民が、なんの準備もなく、手も足もでないというように目にあわなくてもすむのである。

だが、フルシチョフらは、帝国主義が新しい戦争を画策していることの危険性を暴露することに反対している。かれらの論調にしたがえば、帝国主義は実際上すでに、平和を愛する帝国主義にかわっているのだ。これは、帝国主義が大衆をマヒさせるのを助け、大衆の闘志を離散させ、

この可能性
指摘
準備

I

帝国主義が画策する新しい戦争の危険性にたいする大衆の警戒心を失わせようとするものである。

2

第二、フルシチョフは、新しい世界戦争がさけられるという可能性を、勝手にすべての戦争がさけられるといいくるめ、帝国主義が存在する限り戦争はさけられないというレーニン主義の原理をすでに時代おくれたとみなしている。

新しい世界戦争はさける可能性があるということ、これは一つの問題である。革命戦争をふくむあらゆる戦争がすべてさけられるということ、これはまったく別問題である。この二つのことを混同することはまったく誤りである。

帝国主義が存在する限り、人が人を搾取する制度が存在する限り、戦争を引きおこす温床があるのである。これは、レーニンがばう大な科学研究をおこなった結果、発見した客観的法則である。

スターリンは一九五二年に、新しい世界戦争を防止することは可能であるという論点に言及したのち、「戦争の不可避性をとりのぞくためには、帝国主義を絶滅しなければならぬ」⑩と語った。

レーニンとスターリンが正しいのであり、フルシチョフがまちがっているのである。

歴史は、われわれにつきぎのことを教えている。帝主義がおこした世界戦争は、ただの二回だけであつた。だが、帝主義がおこしたその他のさまざまな戦争は数えきれないほどあつた。第二次世界大戦以後、アメリカをかしらとする帝主義の侵略政策と戦争政策は、全世界の各地、とくにアジア、アフリカ、ラテンアメリカでひきつづき、たえまなく、いろいろな形の局地戦争や武力衝突を引きおこしてきた。

つぎの事実はひじょうにはつきりしている。帝主義、とくにアメリカ帝主義が自己の軍隊を派遣し、あるいはかれらの手先を利用して、民族独立をかちとりこれをまもろうとする被抑圧民族や被抑圧国家にたいして血なまぐさい弾圧をおこなつてゐる状況のもとでは、民族解放戦争はさげることのできないものである。

レーニンは、△帝主義のもとでの民族戦争の可能性をいっさい否定することは、理論的には正しくなく、歴史的にはあきらかにまちがつており、実践的にはヨーロッパ的排外主義に等しい。⑩とのべている。

つぎの事実は同様にはつきりしている。ブルジョア反動派が武力をもつて自国の人民を弾圧している状況のもとでは、国内革命戦争はさげることのできないものである。

レーニンはつぎのようにのべている。△国内戦争もまた一種の戦争である。階級闘争をみとめ

るものは国内戦争をみとめないわけにはいかない。国内戦争は、あらゆる階級社会で、階級闘争の自然な、ある事情のもとでは不可避的な継続であり、発展であり、激化である。あらゆる大革命がこのことを確認している。国内戦争を否認すること、あるいは忘れることは、極端な日和見主義におちこみ、社会主義革命を断念することを意味するであらう。⑪

歴史上、あらゆる国の大革命において、革命戦争を經ていないものはほとんどない。アメリカの独立戦争と南北戦争がその一例である。フランスの革命も一つの例である。ロシアの革命と中国の革命もまたその例であることは、いうまでもない。ベトナムの革命、キューバの革命、アルジェリアの革命などもことごとく人びとの知つてゐる例である。

一八七一年、マルクスは第一インター成立七周年記念の演説のなかで、パリ・コンミュンの経験を含括したとき、階級的支配と階級的圧迫を消滅する条件を指摘した。その時、マルクスは△かならずさきにプロレタリアート独裁を實行しなければならぬ。そうしてこそはじめて、このような変革を実現することができる。しかもプロレタリアート独裁の第一に重要な条件は、プロレタリアートの軍隊である。労働者階級はかならず戦場で自身を解放する権利をたたかひとらなければならぬ⑫とのべている。

一九三八年、毛沢東同志はマルクス・レーニン主義の原理にもとづいて、ロシア革命と中国革

命の経験を語った時、「鉄砲から政権が生まれる」という有名な断定を提起した。現在、この断定もソ連共産党指導部の攻撃のまよになつてゐる。かれらは、これこそ、中国が「好戦的」だといふことの論拠であるといつてゐる。

尊敬すべき友人のみなさん、きみたちのこのような中傷にたいして、毛沢東同志は早くも二十五年前に反ばくを加えたことがある。毛沢東同志は、△国家学説についてのマルクス主義的観点から見れば、軍隊は国家権力の主要な構成要素である。国家権力を奪取し、保持しようとするものはだれでも、強大な軍隊をもつべきである。あるものはわれわれを「戦争万能論」をとなえてゐると嘲笑してゐる。そのとおりだ。われわれは革命戦争の万能論者である。これはわるいことではなくて、よいことであり、マルクス主義的であるのだ。」◎と語つた。

毛沢東同志が語つたこれらの話のどこに、いつたいまちがあるのか。数百年にわたる世界各国のブルジョア革命と、プロレタリア革命の歴史的経験全部を否定するもののみが、毛沢東同志の提起したこの論点を否定するのである。

中国人民は、すでに鉄砲によつて社会主義の政権をつくりあげた。帝国主義とその手先をのぞいては、だれでもこれがいよいことであり、これが世界平和をまもり、第三次世界大戦を阻止する重要な要因であることを容易に理解できるのである。

マルクス・レーニン主義者は絶対に自己の観点をかくすものではない。われわれは各国人民の革命戦争を心から支持してゐる。ちょうどレーニンがいつたように、このような革命戦争は△歴史上に知られてゐるすべての戦争のうちで、ただ一つの、正当な、適法な、正義の、真に偉大な戦争である。」◎もしこの点でわれわれを好戦的だと攻撃するならば、それはただ、われわれが真に被抑圧人民と被抑圧民族の側に立つてゐること、真のマルクス・レーニン主義者であることを証明するだけである。

帝国主義者と修正主義者は、従来からこのように、ボルシェビキを「好戦的」だとののしり、レーニンやスターリンのような革命の指導者を「好戦的」だとののしつてきた。われわれはこれらに帝国主義者と修正主義者から同じように悪罵されてゐるが、これはほかでもなくわれわれがマルクス・レーニン主義の革命的旗じるしを高くかかげてゐることを物語つてゐる。

フルシチョフらは、帝国主義制度がなお存在している条件のもとでも、すべての戦争はさげられるし、「兵器もなく、軍隊もなく、戦争もない世界」を実現できるときに宣伝してゐる。このような論調は、とりもなおさずはるか以前に破産したカウツキーの「超帝国主義」論である。かれらの目的は、ひじょうにはつきりしてゐる。つまり、帝国主義制度のもとでも永久の平和が実現できるということを各国人民に信じこませ、これによつて、革命を解消し、帝国主義と

その手先に反対する民族解放戦争と国内革命戦争を解消し、そのうえ實際上、帝国主義が新しい戦争を準備することを助けようとしているのである。

核迷信と核恐喝は現代修正主義の

理論的基礎であり、政策的指針である

ソ連共産党指導部の戦争と平和の問題での理論的真髓は、核兵器の出現によってすべてが変わり、階級闘争の法則が変わったということである。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、「今世紀なかごろに製造されたロケット——核兵器によって、戦争に関する以前の概念をかえた」とのべている。いつたい、どのようにかわったというのか。

ソ連共産党指導部は、核兵器の出現後、正義の戦争と非正義の戦争の区別がなくなったとみなしている。かれらは、「原爆は階級闘争の原則にしたがわない」とか、「原爆は、帝国主義者がどこにおり、また勤労人民がどこにいるかを見分けることができない。それは、地つづきの広い場所に爆撃を加える。それゆえ、一人の独占資本家を消滅することにいく百万の労働者を消滅するようになる」とのべている。

ソ連共産党指導部は、核兵器の出現後、被抑圧人民と被抑圧民族はかならず革命を放棄し、かならず正義の人民革命戦争と民族解放戦争を放棄しなければならない、そうしなければ、人類は絶滅するとみなしている。かれらは、「どんなに小さな『局地戦争』でも世界大戦という火事を引きおこす火種になる」、「現在では、どのような戦争でも、たとえ普通の戦争、核兵器を使わずにはじまった戦争でも、壊滅的なロケット——核戦争になるであろう」。こういう事態になれば、「われわれは自分たちのノアの箱船——地球を壊滅させてしまおうであろう」とのべた。

ソ連共産党指導部は、帝国主義の核恐喝と戦争の脅威に直面して、社会主義国は屈服以外にみちはなく、抵抗してはならないとみなしている。フルシチョフはつぎのようにのべたことがある。「もし帝国主義の気遣いどもが世界熱核戦争を引きおこしたならば、戦争をうみだす資本主義体制は必然的に消滅される。このことは少しも疑う余地がない。しかし、社会主義国と社会主義をめざす全世界の闘争の事業が、世界熱核戦争による災難のなから勝利をうる事ができるだろうか。わざと目をして事実を見ない人のみがそう考えるのである。マルクス・レーニン主義者としては、世界文化の中心の廃虚の上に、人影もない荒れ地、核微粒子に汚染された土地の上に、共産主義の文明をきざきあげることを考えることはできない。われわれが、ここでつぎのことを、とやかくいわなくても、多くの人民にとっていえば、社会主義という問題はまったく存在し

なくなる。なぜなら、かれらの肉体がすでにわれわれの地球から消えうせてしまっているからだ」と。

総括していへば、ソ連共産党指導部のみるところでは、核兵器の出現後、社会主義陣営と帝国主義陣営との矛盾、資本主義国におけるプロレタリアートとブルジョアジーとの矛盾、被抑圧民族と帝国主義との矛盾は、一つ残らず消えさってしまつたのである。そして現在、世界中のあらゆる階級的矛盾は、根こそぎなくなつてしまつたのである。ソ連共産党指導部は、現代世界の矛盾を、ただ一つしか存在しないと見ている。すなわち、それは、帝国主義と被抑圧階級、被抑圧民族とがともに生きのびるか、それとも全部絶滅するかというかれらがデッチ上げた矛盾である。

ソ連共産党指導部の頭からは、マルクス・レーニン主義だとか、宣言や声明だとか、社会主義や共産主義だとか、すべてひっくりくるめて雲のあなたへなげすてられてしまつていたのである。

『ブラウダ』紙がそのことでなんと率直にのべているか見ていただきたい。「もし首をなくしたら、原則などというものにまだなんの御利益ごりやくがあるのか？」と。

これはつぎのようにいつているのと同じである。つまり、ロシア革命のため、十月革命の勝利のため反動派の銃剣のもとで犠牲となつたすべての革命家、反ファッショ戦争のなかで英雄的に命をささげたすべての戦士、帝国主義に反対し、民族独立をめざして血を流したすべての英雄、

古今を通じて革命事業に身をささげたすべての烈士は、一人残らずバカものである。かれらはなにも原則を堅持するため、自分の首を失う必要はなかつたではないか。

これはまぎれもない裏切り者の哲学である。これは裏切り者の自供書のなかでこそ、はじめでみることのできる恥ずべきいぐさである。

まさにこのような核迷信、核恐喝の「理論」にみちびかれて、ソ連共産党指導部はつぎのように考へているのである。すなわち、**世界平和をまもる道は、平和をまもる現代のさまざまな勢力が連合してもっとも広はんな統一戦線を結成し、アメリカ帝国主義やその手先に反対することではなく、米ソ二大核保有国が協力して世界問題を解決することである。**

フルシチョフは、「われわれ（米ソ両国）はともに、世界でもっとも強大な国であり、もしわれわれが平和のために連合したならば、戦争はおこらないであろう。そのとき、もし間違いがいて戦争を挑発しようとしたならば、われわれは指先でおどしついただけで、この間違いをおとなくさせることができる」と語つた。

ここから、ソ連共産党指導部が敵を味方とみなす考え方が、すでにどのような境地に達しているかを、だれでもはつきり見ぬくことができる。

ソ連共産党指導部は、自分の誤りをおおいかくすため、デマをとばし、中傷をくわえるという

やり方をとることもいとわず、中国共産党の正しい路線を攻撃している。かれらは、中国共産党が各国人民の民族解放戦争と国内革命戦争を支持すると主張していることは、世界核戦争を挑発しようとするのだ、と言い張っている。

これは奇怪きわまるデマである。

中国共産党はこれまで、社会主義国は民族解放戦争と国内革命戦争をふくめた各国人民の革命闘争を積極的に支持すべきだと考えてきた。そうしなければ、自分が負っているプロレタリア国際主義的義務にそむくことになる。それとともにわれわれは、すべての被抑圧人民、被抑圧民族は、ただ自己のだんこたる革命闘争にたよってこそ、はじめて解放を勝ちとることができるのであつて、いかなる人も取つて代わることができないと考えている。

われわれはこれまで、社会主義国が各国人民の民族解放戦争、国内革命戦争を支持するのに、核兵器を使用してはならないし、使用する必要もないと考えてきた。

われわれはこれまで、社会主義国はかならず核優位を獲得し、維持しなければならぬと考えてきた。こうしてこそはじめて、帝国主義に核戦争をおこしえないようにさせることができるし、はじめて核兵器の徹底的な禁止に役だつのである。

われわれはこれまで、社会主義国の手中にある核兵器は、永遠に帝国主義の核脅威に抵抗する

ための防衛兵器でしかありえないと考えてきた。社会主義国は絶対に先手をうって核兵器を使用してはならないし、絶対に核兵器をもたせられて核恐喝、核賭博をおこなってはならない。

われわれは、ソ連共産党指導部が各国人民の革命闘争を支持しないというあやまったやり方に反対し、核兵器にたいするかれらのあやまった態度にも反対する。ソ連共産党指導部は自分自身の誤りを反省しないばかりか、かえつて、われわれはソ米が「まっ正面からぶつかり合う」のを欲しており、ソ米を核戦争の渦中においこもうとしていると、非難している。

われわれはお答えする——それはちがう、友人諸君。きみたちは、こげおどしのデマをとばし、中傷をおこなうという口をひっこめたまえ。中国共産党は言論のうえでソ米両大国が「まっ正面からぶつかり合う」のにだんこ反対しているだけでなく、実際行動においても、ソ米両大国が直接的に武力衝突をひきおこさないよう力をつくしている。われわれは朝鮮の同志とともに、朝鮮での抗米戦争において、また、われわれは台湾海峡での反米闘争において、いつもむしろ自分自身が必要な犠牲的重荷を負い、社会主義陣営をまもる最前線に立つても、ソ連が第二線に立つようにつとめてきた。こんにち、ソ連共産党指導部がこともあろうに、このようなデマをデッチあげているが、これではどこにプロレタリア道徳のかけらでもあるといえるだろうか。

事実、核兵器をつかつてあれこれの国の反帝闘争を援助しようと、いつもホラを吹いているのは、われわれではなくて、ソ連共産党指導部である。

被抑圧人民、被抑圧民族は核兵器を保有していないので、核兵器を使用して革命をすすめることができないし、またその必要もないことは周知のとおりである。ソ連共産党指導部自身も認めているように、民族解放戦争と国内戦争においては、しばしば敵味方双方をへだてるようなはっきりした戦線がない。それゆえ、核兵器使用の問題は話にもならない。それなら、われわれはソ連共産党指導部におたずねしたい。いったい社会主義国は核兵器を使用して各国人民の革命闘争を支援する必要があるか。

われわれはまたソ連共産党指導部におたずねしたい。いったい社会主義国が核兵器をどのよう
に使用して被抑圧人民、被抑圧民族の革命闘争を支援しようというのか。社会主義国が民族解放戦争、国内革命戦争を現にすすめているところに核兵器をつかい、それによって各国の革命的人民に帝国主義者もろとも核打撃をこうむらせるのか。それとも、帝国主義が通常兵器を使用して侵略戦争をすすめている状況のもとで、社会主義国が帝国主義本国にたいし先手をうって核兵器を使用するというのか。この二つの状況のうちのいずれの状況のもとでも、社会主義国が絶対に核兵器を使用してはならないことは、ひじょうにはっきりしている。

實際上、ソ連共産党指導部が核兵器をふりまわすのは、けっして各国人民の反帝闘争をほんとうに支援するためではない。

かれらは時には、まったく実現しようとする用意のない一片の声明を発表するにすぎない。その目的は安価な名声をだましとろうというところにある。

かれらは時には、たとえばカリブ海の危機のときに僥倖をねらい、風向きをみてうまく立ち回り、無責任にも核賭博をおこない、そうすることによって人には言えない目的を達しようとしている。

いったんかれらの核恐喝が相手方に見破られ、逆に相手方の恐喝にぶつかると、かれらはただちに一步一步後退して、冒險主義から降伏主義へところがりおち、核賭博でことんまで負けてしまう。

偉大なソ連人民とソ連赤軍は、過去においても、現在においても、また将来においても世界平和をまもる偉大な力であることをわれわれは指摘したい。だが、核迷信と核恐喝にもとづくフルシチョフの軍事思想は、まったくあやまったものである。

フルシチョフの眼中にはただ核兵器があるだけである。かれのみるところでは、「現代軍事技術の発展した条件のもとで、空軍と海軍はすでにその過去の意義をうしなつた。この種の兵器は

削減を要するのではなくて、取って代わられる必要があるのである」

地上での戦闘任務を負っている部隊と兵士は、当然のことながらさらにとるに足りないものである。フルシチヨフは、「当面、国防力を決定するのは、われわれに銃をかついでいる兵士がどれだけあるか、軍服をきているものがどれだけあるかということではない」、「国家の防衛力は決定的程度で、火力のいかにかかっており、この国がどのような発射手段を掌握しているにかかっている」とのべた。

民兵や人民大衆にいたっては、なおさら話にならないものである。フルシチヨフには有名なことばがある。すなわち、現代化した兵器をもつわれわれにいわせれば、民兵、これは軍隊ではなくて、肉塊である、と。

フルシチヨフのこの一連の軍事理論は、戦争と軍隊にかんするマルクス・レーニン主義の学説にまったくそむいている。こうしたあやまった方針にしたがってすすんでいけば、軍隊を瓦解させ、精神面から自らの武装を解除してしまうことになるだけである。

ひじょうにはつきりしていることは、もしもフルシチヨフのあやまった軍事戦略思想を受けいれれば、どの社会主義国でも自国を十分危険な境地においこむだけである。

フルシチヨフが自分に「偉大な平和戦士」といったたぐいの称号をあたえたり、自分に「平和

賞」を授けたり、自分に英雄勳章をつけたりすることは、もちろんかれの勝手である。だが、かれがどんなに自画自賛しても、かれは軽率、粗忽に核兵器をもてあそぶという危険なやり口をおおいかくすことができず、帝国主義の核恐喝のまゝに卑屈にへりくだり、節をまげろすがたをおおいかくすことができない。

闘争か、それとも降伏か

世界の平和は、各国人民のたたかひによつてのみえられるものであって、帝国主義に乞い求めてえられるものではない。人民大衆に依拠して、帝国主義の侵略政策と戦争政策にまっとうから対決する闘争をすすめることによつてのみ、はじめて効果的に平和をまもることができ、こそ正しい方針である。

まっとうから対決する闘争は、帝国主義およびその手先との長期にわたる闘争で、中国人民が体得した一つの重要な経験である。

毛沢東同志はつぎのように語っている。

△蒋介石は、人民からは、わずかな権利もかならずうばい、わずかな利益もかならずとりあげ、われわれはどうか。われわれの方針はまっとうから対決し、一寸の土地もかならず争うこと

である。われわれは蒋介石のやり方にならつてやっている。」²²⁰

毛沢東同志はまたこう語っている。

△「蒋介石はいつも人民に戦争をおしつけ、左手にも刀をもてば、右手にも刀をもっている。だから、われわれもかれのやり方にならつて刀をとる。」²²¹

毛沢東同志は一九四五年に、当時の国内政治情勢を分析した時、またつぎのように語っている。

△「まっこうから対決する」にも、情勢を見なければならぬ。時によつては、話し合いにでかけないことが、まっこうから対決することになるし、時によつては、話し合いにでかけることが、やはりまっこうから対決することになる。……むこうが攻めてくれば、われわれは戦うが、戦うのは平和をかちとるためである。解放区への攻撃をあえてする反動派に大きな打撃をあたえなければ、平和はやつてこない。」²²²

毛沢東同志は、中国大革命の失敗の歴史的教訓を総括してつぎのよりのべている。△陳独秀は、反革命が人民を攻撃したのにたいして、まっこうから対決し、一寸の土地もかならず争うという方針をとらなかつた。その結果、人民がすでに手にいれていた権利を、一九二七年の数カ月のうちに、一つ残らずきれいにうしなつてしまった。」²²³

中国の共産主義者は、まっこうから対決する闘争方針を心得ており、まっこうから対決する闘争方針を堅持している。われわれは降伏主義に反対するとともに、冒險主義にも反対する。この正しい方針は、中国革命の勝利を保証し、また革命勝利後における反帝闘争のなかで、中国人民がかちとつた偉大な成果をも保証した。

中国の共産主義者が提出したこの正しい闘争方針を、すべての革命的人民はみな賛成し、歓迎している。すべての帝国主義と反動派はことごとくこの方針をおそれ、にくんでいる。

中国共産党の提起したまっこうから対決する方針は、ソ連共産党指導部の悪どい攻撃にあつてはいるが、これは、ソ連共産党指導部がすこしも帝国主義に反対しようとしないうことを証明しているにほかならない。かれらはまっこうから対決する方針を攻撃し、中傷しているが、これは、かれらが帝国主義に迎合し、帝国主義に屈服し、降伏するあやまつた路線をおおいかくしているにほかならない。

ソ連共産党指導部は、帝国主義とまっこうから対決する闘争をすすめれば、緊張した情勢をまねくことになるのではないか？ これは大変なことではないか、といつている。

このような論理にしたがえば、帝国主義が他人を侵略し、脅かすことは許すが、侵略される者が闘争をおこなうことは許さず、帝国主義が他人を圧迫することは許すが、圧迫される者が反抗

にたちあがるのは許さない」ということとなるほかはない。これは帝国主義の侵略的犯罪行為にたいして露骨なやり方でその責任を帳消しにしてやるものである。これはまぎれもない弱肉強食の哲学である。

国際間の緊張した情勢は、帝国主義の侵略政策と戦争政策がつくりだしたものである。帝国主義の侵略と脅威にたいして、とうぜん各国人民はだんこたる闘争をすすめるなければならない。事実が証明しているように、闘争を経てこそはじめて、帝国主義をいやおうなしに退却させることができ、国際情勢を本当に緩和させることができる。これに反し、帝国主義にたいしひたすら譲歩することは、真の緩和をうることができず、逆に、帝国主義の侵略を助長するだけである。

われわれは従来から、帝国主義が国際間の緊張した情勢をつくりだすことに反対し、国際間の緊張した情勢の緩和をもちとることを主張してきた。しかし、帝国主義者はいたるところで侵略をおこない、いたるところで緊張した情勢をつくりだそうとしているが、それもまた、かれらの望むところは反対の方向へ発展して行くだけである。

毛沢東同志は、△アメリカ帝国主義は緊張した情勢はつねに自身にとって有利であると思いついでいるが、 事實はそれにひきかえ、アメリカのつくりだしたこれらの緊張した情勢は、アメリカ人の望んでいるのは反対の方向に発展し、全世界人民を動員して、アメリカ侵略者に反対す

る役割を果たしている。」◎と語った。

毛沢東同志はまた、△もし、アメリカ独占資本グループがあくまでその侵略政策、戦争政策をとりつづけるならば、その必然的な結果として、いつかは全世界人民から絞首刑に処されるだろう。」◎と語った。

「一九五七年の宣言はいみじくも次のようにいつている。「これら反人民的な帝国主義侵略勢力がとっている政策は、かれらを自滅させ、自分で自分を葬る墓掘人をこしらえている」

これは歴史の弁証法である。帝国主義を神とあがめているこれらの人には、こうした真理は理解しにくいのである。

ソ連共産党指導部は、きみたちはまっとうから対決する闘争を主張しているが、これは、とりもなおさず話し合いを拒否することである、といっている。これもまたデタラメない方である。

われわれはこれまで、状況のいかんにかかわらず一概に話し合いを拒否することは、絶対にマルクス・レーニン主義者ではないと考えてきた。

中国の共産主義者は、国内革命戦争中にかつて国民党とたびたび話し合いをおこなったことがある。中国解放の前夜においてさえ、中国の共産主義者は話し合いを拒否しなかった。

一九四九年三月、毛沢東同志はこういつている。全面的な平和会談であろうと、局地的な平和会談であろうと、われわれは、その準備をしなければならぬ。われわれは、わずらわしさをいと、清閑をのぞんで、これらの交渉をうけいれないというのであつてはならないし、またぼんやりした考えのままでもうけた交渉をうけいれるのであつてはならない。われわれの原則性はしつかりしたものでなければならぬし、われわれはまた、原則性を通すために許され、かつ必要ならゆる融通性をもたなくてはならない。」^{②⑧}

国際的に帝国主義や反動派と闘争する場合にも、中国の共産主義者は、同様に正しい態度で話し合いに対処している。

一九五一年十月、毛沢東同志は朝鮮休戦会談の問題についてふれた時、つぎのようにいつている。

われわれはひじょうに早くから、朝鮮問題は平和的な方法で解決されるべきものであると表明している、現在でもその通りである。アメリカ政府が公平かつ合理的な基礎のうえにたつて問題を解決しようと望み、再び過去のように種々の恥ずべき方法で話し合いの進行を破壊し、妨害しさえしなければ、朝鮮の休戦会談は成功するだろう、もしそうでないなら成功しないだろう。」^{②⑨}

だんごたる闘争を経て、アメリカ帝国主義に話し合いで朝鮮の休戦協定をうけ入れさせた。

われわれは、一九五四年のジュネーブ会議に積極的に参加し、インドシナにおける平和の回復に貢献した。

われわれは、わが国の領土台湾を占領しているアメリカにたいしても、腰をおろして話し合いをするよう主張している。中・米大使級の話し合いはすでに八年以上もつづけられている。

われわれは、一九六一年に開かれたラオス問題にかんするジュネーブ会議にも積極的に参加し、ラオスの独立と中立を尊重することにかんするジュネーブ協定の調印を促した。

中国の共産主義者は、自分と帝国主義国との話し合いだけを許し、ソ連共産党の指導部と帝国主義国の指導者との話し合いをかたくなに反対しているかどうか。

もちろんそうではない。

事実、われわれは、ソ連政府が帝国主義国とおこなう、世界の平和をまもるのに不利でない、有利なすべての話し合いを従来からことごとく積極的に支持してきた。

一九六〇年五月十四日、毛沢東同志はつぎのように語った。

われわれは成果の有無、成果の大小をとわず、首脳会議の開催を支持する。しかし、世界平和の獲得は、主として各国人民のだんごたる闘争に依拠すべきである。」^{③①}

われわれは帝國主義國と話し合うことに賛成である。だが、フルシチヨフのように、世界平和への希望を話し合いに託し、話し合いにたいする實際にあわない幻想をばらまき、それによって各国人民の闘志をマヒさせるようなことは絶対に許されない。

正直にいうと、話し合いにたいするフルシチヨフのこのようなあやまつた態度は、話し合い自体にとつても不利である。フルシチヨフが帝國主義にたいして譲歩すればするほど、飢えのあまり食をえらばぬというようなことをすればするほど、帝國主義の食欲はますますつのるばかりである。フルシチヨフは歴史上最大の話し合い間違いという姿で出現し、その結果はつねにかた思いに終わり、そのつど人の笑い草になっている。無数の歴史的事実は、帝國主義と反動派が従来から、降伏主義者にたいしなんらの容赦もしないことを証明している。

平和をまもる道と戦争にみちびく道

上述したところを総括すれば、戦争と平和の問題で、われわれとソ連共産党指導部との意見の相違は、帝國主義に反対する必要があるのか、ないのか、革命闘争を支持する必要があるのか、ないのか、全世界の人民を動員して帝國主義の戦争計画に反対する必要があるのか、ないのか、マルクス・レーニン主義が必要であるのか、必要でないのか、という異なる路線についての意見

の相違である。

中国共産党は、その他のすべての真の革命的政党と同様に、一貫して、帝國主義反対と世界平和擁護の最前線にたっている。われわれは、世界平和をまもるためには、たえず帝國主義を暴露し、人民大衆を動員、組織して、アメリカをかしらとする帝國主義と闘争しなければならず、また、社会主義陣營の勢力の発展、各国プロレタリアートと勤労人民の革命闘争、被抑圧民族の解放闘争、平和を愛するすべての人民と國ぐにの闘争、アメリカ帝國主義とその手先に反対する広はんな統一戦線などに依拠しなければならない、と考えている。

われわれの主張しているこの路線は、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明に規定されている各国共産党の共同路線に合致するものである。

この路線にしたがえば、人民大衆の自覚をたえず高め、世界平和をかちとる闘争を正しい方向に向かつて発展させることができる。

この路線にしたがえば、社会主義陣營を中核とする世界の平和勢力をたえず強化し、帝國主義戦争勢力にたえず打撃を与え、これを弱めることができる。

この路線にしたがえば、各国人民の革命をたえず発展させ、強大にし、帝國主義の手足をしばりつけることができる。

この路線にしたがえば、アメリカ帝国主義とその他の帝国主義との矛盾をふくむ、動員できるすべての要因を十分に動員して、最大限にアメリカ帝国主義を孤立させることができる。

この路線にしたがえば、アメリカ帝国主義の核恐喝を粉碎し、新しい世界大戦をおこそうとするその計画をうちやぶることができる。

これこそ各国人民が革命の勝利をかちとり、また世界の平和をかちとる路線である。これこそ世界の平和をまもるための正しい、効果的な道である。

ソ連共産党指導部が実行している路線は、われわれの路線、すべてのマルクス・レーニン主義者と革命的人民の共同路線とまったく相反している。

ソ連共産党指導部は闘争のほこ先を世界平和の敵に向けしないで、社会主義陣営に向け、世界平和をまもる中心勢力を弱化し、破壊している。

ソ連共産党指導部は核恐喝をもって社会主義諸国の人民をおどして、かれらが全世界の被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争を支持するのを許さず、それによってアメリカ帝国主義が社会主義陣営を孤立させ、各国人民の革命を弾圧するのに便宜を与えている。

ソ連共産党指導部は核恐喝をもって全世界の被抑圧人民と被抑圧民族をおどして、革命を許さず、そのうえ、アメリカ帝国主義とグルになって革命の「一点の火花」をもみけそうとし、そう

することによってアメリカと社会主義陣営のあいだにある中間地帯でアメリカ帝国主義が侵略政策と戦争政策をほしのままにおしすすめるのに便宜を与えている。

ソ連共産党指導部はまたアメリカの同盟国をおどして、かれらがアメリカの支配に反対する闘争をおこなうのを許さず、それによってアメリカ帝国主義がこれらの諸国を奴隷化し、その陣地をかためるのに便宜を与えている。

ソ連共産党指導部のこのような一連のやり方は、帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対する闘争をねこそぎ清算している。

ソ連共産党指導部のこのような一連のやり方は、アメリカ帝国主義とその手先に反対し世界平和をまもる統一戦線をねこそぎ清算している。

ソ連共産党指導部のこのような一連のやり方は、世界平和の主要な敵を最大限に孤立させるのではなく、世界の平和勢力を最大限に孤立させている。

ソ連共産党指導部のこのような一連のやり方は、實際上、世界平和をまもる闘争任務を清算している。

これはアメリカ帝国主義の「世界戦略」の路線にこたえるものである。

これは世界の平和をまもる道ではなく、戦争の危険性を助長し、戦争にみちびく道である。

われわれが当面している世界は、すでに第二次世界大戦前夜の世界とはるかにちがっている。いまでは、すでに強大な社会主義陣営が存在している。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの民族解放運動はあらしのような勢いでもり上がっている。世界人民の自覚はすでに大きく高まっている。世界の革命的人民の力はすでに大きく強化している。ソ連人民、社会主義諸国の人民、世界各国の人民は、自分たちの運命を帝国主義の戦争勢力や、かれらの嚙子方どもの支配にまかせ、することは、絶対にできない。

帝国主義と各国反動派の侵略、戦争行為はいま世界の人民を教育し、一步一步と自覚させつつある。社会的実践は真理を検証する唯一の標準である。戦争と平和という問題の認識のうえで、やまった観点をもった人びとのうち、ひじょうに多くの人びとが帝国主義と反動派の逆の面からの教育によつて変わってくるであろう。われわれはこのことを信じている。われわれはこれにたいて、ひじょうに大きな希望をよせている。全世界の共産主義者、全世界の人民が、帝国主義のペテンを暴露し、修正主義のウソを見破り、世界平和擁護の任務をになえば、帝国主義が新しい世界大戦をおこそうとする計画を粉碎し、世界の平和をまもりぬくことがかならずできる、とわれわれは信じている。

64.2.11

- ① 「労働者・兵士代表ソビエト第二回全ロシア大会」。「レーニン全集」第二六巻
- ② 「国際情勢について」。「スターリン全集」第六巻
- ③ 「ソ同盟共産党（ボ）中央委員会七月総会の総結果について」。「スターリン全集」第一巻
- ④ カウツキー「民族問題」
- ⑤ カウツキー「国防問題と社会民主党」
- ⑥ 一九二二年ケムニッツにおけるドイツ社会民主党大会での帝国主義問題にかんするハーセツの発言。「社会民主党大会手引（一九二〇〜一九一三年）」第二巻
- ⑦ カウツキー「戦争と民主主義」の序文
- ⑧ 「社会党インターナショナル一九一九年のベルン大会の国際連盟にかんする決議」
- ⑨ カウツキー「戦争時期の社会民主党」
- ⑩ カウツキー「社会民主党の教義問答」
- ⑪ 一九二二年のケムニッツにおけるドイツ社会民主党大会での軍縮問題にかんするベルンシュタインの発言。「社会民主党大会手引（一九二〇〜一九一三年）」第二巻
- ⑫ カウツキー「再び軍縮を論ず」
- ⑬ カウツキー「社会主義者と戦争」
- ⑭ 「反戦闘争と自国政府のがわについて社会主義者に反対する闘争とを支持する労働者へ」。「レーニ

『全集』第三卷

- ⑮ 「アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話」。『毛沢東選集』第四卷
- ⑯ 「国家の財政・経済状況の基本的好転をめざしてたたかおう」。一九五〇年六月十三日づけの『人民日報』に掲載
- ⑰ 「帝国主義といっさいの反動派はハリコの虎である」
- ⑱ 「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」
- ⑲ 「プロレタリア革命の軍事綱領」。『レーニン全集』第二三卷
- ⑳ 「インターナショナル成立七周年を記念して」。『マルクス・エンゲルス全集』第一七卷
- ㉑ 「戦争と戦略問題」。『毛沢東選集』第二卷
- ㉒ 「革命の日々」。『レーニン全集』第八卷
- ㉓ 「抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針」。『毛沢東選集』第四卷
- ㉔ 「重慶交渉について」。『毛沢東選集』第四卷
- ㉕ 「最高国務会議での演説」。一九五八年九月九日づけの『人民日報』に掲載
- ㉖ 「中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告」。『毛沢東選集』第四卷
- ㉗ 「中国人民政治協商会議第一期全国委員会第三回会議での開会の辞」。一九五二年十月二十四日づけの『人民日報』に掲載

⑳ 一九六〇年五月十五日づけの『人民日報』参照

戦争と平和の問題での二つの路線
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (五)

1963年12月 初版発行

定価 30 円

出版者 外文出版社

(北京阜成門外百万莊)

発行者 中国国際書店

(北京 P.O.B. 399)

編号: (日)3050-798

3-J-573P
00033

▲ソ共連産党指導部とわれわれとの
意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

B 6 判 36ページ 定価 40円

▲スターリン問題について

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (二)

B 6 判 34ページ 定価 20円

▲ユーゴスラビアは社会主義国か

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (三)

B 6 判 62ページ 定価 30円

▲新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (四)

B 6 判 50ページ 定価 20円

▲ソ連共産党指導部がインドと連合して
中国に反対している真相

B 6 判 62ページ 定価 30円

出版者 北京 外文出版社
発行者 北京 中国国際書店

